

ベルギーにおける三空間併存時代の アイデンティティと極右問題

上 西 秀 明

目次

はじめに

1 : 三空間併存論をめぐる限界と可能性

1-1 : 三空間をめぐる分析視角

1-2 : 解析データおよび仮説

2 : 三空間併存時代のアイデンティティ

2-1 : ベルギーにおける三空間併存時代のアイデンティティ

2-2 : 三つのアイデンティティの関係

3 : 三空間併存時代のアイデンティティと極右支持

3-1 : ベルギーにおける極右政党

3-2 : 極右支持の規定要因と説明変数

3-3 : アイデンティティと極右支持の関係

3-4 : 極右支持の諸要因とアイデンティティ

4 : アイデンティティと極右支持の規定要因

4-1 : パス・モデルによる分析 1 - ベルギーの場合 -

4-2 : パス・モデルによる分析 2 - フランデレンの場合 -

4-3 : アイデンティティと極右支持の規定要因

おわりに

はじめに

欧州統合が日々進展する中、そこに居住する EU 加盟国国民の内面にもそれにとまなう

変容の波が押し寄せていると言われる。具体的には、それは「ヨーロッパ市民権」なる概念に象徴され、人々が抱くアイデンティティの問題として語られる。超国家レベルへの権限の移譲は国民国家の地位を相対的に低下させるとともに、それまで存在を制約されていた地域が顕在化、それにともなう人々のアイデンティティ・レベルでの変化は新たな社会現象を後押しすると考えられた。

こうした状況を捉えて、梶田は「ヨーロッパ・国家・地域」からなる「三空間併存時代」の到来を予言し、相互に異なるレベルにある人々の帰属意識が従来のような相互排他的なものとは別の論理で存在するようになると主張した。ベルギーの例で言えば、一人のベルギー国民がヨーロッパ人であり、ベルギー人であり、かつ地域市民・フランデレン人あるいはワロニー人であることを矛盾なく受け入れることを意味する。

このようなアイデンティティのあり方は、伝統的民族地域主義運動とベルギー国家との間の複雑な歴史を振り返るとき、確かに一つの劇的な新局面の到来を予感させるに十分なものである。しかし、マーストリヒト条約の発効(1993年11月)から既に8年を経ても、ヨーロッパ意識の担い手は学歴レベルにおいても、また社会的な職業威信レベルにおいてもエリートと呼ばれる一部の上層に限られているとの指摘もあり¹、その広がりには限界も囁かれている。また、ヨーロッパ意識が新たな排他主義の温床となる可能性も指摘されている²。そして実際のところ、統合とそれをめぐる人々の意識についての理解はいまだ抽象性を備えたまま、アイデンティティは政治現象の分析概念として援用されている。このことは極右現象をめぐっても同様であり、ナショナル・アイデンティティは新右翼台頭を説明する一概念として使用される。しかし西欧諸国における極右研究では、それは移民問題を契機とした新しい潮流として理解されており、アイデンティティ概念によって抽象的に説明を求めるべきものではない。

本稿は、一連の欧州統合プロセスによって生じたとされる三つの「空間帰属アイデンティティ」の有無を実際に検証するとともに、それぞれのアイデンティティが昨今の極右問題とどのように関係しているのかについて、ベルギーの事例を用いて検証しようとするものである。特に三空間併存時代のアイデンティティと極右政党支持の関係に焦点を絞りつつ、これまでなされてきたベルギーにおける極右勢力台頭の説明の可否を問い直すとともに、新右翼問題の本質の一端を描き出すことに努めたい。その際、サーベイ・データを用いた計量分析の手法に従うこととするが、極右研究における計量的アプローチは西欧各国では既に多くの蓄積がなされているところであり、諸変数の概念化・説明モデルの信頼性、理論等について有用な指針が多く存在する。こうした手法に沿うことで、従来の集計デー

タの主観的解釈とは異なった、より客観的かつ実証的な極右研究の発展に貢献することを目指すとともに、アイデンティティと極右台頭の解釈の間にある、いまだ判然としない関係性に光を当ててみたい。

1：三空間併存論をめぐる限界と可能性

1-1：三空間をめぐる分析視角

梶田によれば、EU加盟国各国では統合の進展に伴いヨーロッパ・国家・地域という三空間が併存する状況が出現、人々のアイデンティティもそれに呼応する形でヨーロッパ市民、加盟国国民、自治権を有する地域市民という三つが併存するようになったとされる。新たに発生したヨーロッパ市民や地域市民といった帰属意識は従来の国民概念を相対化しつつも、相互排他的になることなく、人々は矛盾なくそれらを内に秘めるようになって考えられた。そこで想定されているアイデンティティの組み合わせは8つのタイプになる（表1-1）。梶田はこれらの中でも+が二つ以上の「フレキシブル・アイデンティティ」が増加すると考えた³。

表 1-1 ヨーロッパにおける多様なアイデンティティ関係

	1	2	3	4	5	6	7	8
ヨーロッパ	+	+	+	-	+	-	-	-
国家	+	+	-	+	-	+	-	-
地域	+	-	+	+	-	-	+	-

（出典：梶田 1993a p42）

この指摘は、統合の進展とともに存在感を強める「地域」を抱えるEU加盟国 - 例えば、ベルギーやスペイン - の分析に援用され、国民的アイデンティティの希薄化という国民国家の相対化過程の具体例として、ナショナリズム研究の分野で少なからぬ支持を獲得している。しかし、その分析視角には限界もある。確かに地域主義的な主張が日増しに強まる加盟国においては、ヨーロッパ・国家・地域という三つの枠組みを妥当性を持って描くこともできよう。しかし、そうでない加盟国にあっては、とりわけ「地域」の存在を説得力のある形で確定することすら困難である。また、この「地域」なるものをベルギーのフラ

ンデレンやスペインのカタルーニャなど、フロッチ⁴が述べるところのサブ・ネーションに相当するものと捉えるか、あるいは、より人々の生活に密着した居住自治体と捉えるかで、帰属意識の内容そのものも修正を迫られるであろう。地方自治体はあくまで行政上の国家の下位単位に過ぎず、地域民族創造の公的プログラムを立案・動員するような存在ではない。従って、そうした主体をヨーロッパ、国家に併存する第三の空間として想定するには無理がある。

こうした「地域」をめぐる不明確さを払拭するためにも、それをここで改めて定義することが重要であろう。梶田の分析に沿うならば、「地域」とは「中央政府と並ぶ広範な自治権を有する『場』として内外の人々に認知され、国民国家形成過程に相当するプロセスを動員して新たに民族地域形成が可能となった『政治単位』」と再定義することができそうである。現段階でこうした三空間併存状況へと到達しえた加盟国はまだ一部であり、将来的にそうした状況を実現しうる可能性が低いと思われる加盟国も少なくない。三空間併存状況の到来とそこでの人々のアイデンティティ分析は、ベルギーやスペイン、あるいはイギリスの現状分析などに適用可能であっても、フランスの地域主義、イタリア北部の分離主義、オランダ・フリースラントの現状へ援用するにはまだまだそれぞれの分野での議論を待つしかない。

しかし、以上の留保を付してもなお、梶田自身の言葉を待つまでもなく⁵、三空間併存モデルは国民国家論の立場から有意義な分析視角を提供しうることは確かであり、とりもなおさず、その状況を日常的にも意識させうるベルギーの現状を読み解く鍵概念となりうるはずである。

1-2：解析データおよび仮説

これまで三空間併存モデルは各国の事例研究に引用されることはあっても、それを実証的に確認する試みは十分になされて来なかった。本稿ではこうした課題に応えるため、1996年にベルギーで実施された“1995 General Election Study Belgium⁶”のデータを用いて解析を行う⁷。この調査は1991年の総選挙後に開始されたパネル調査の第二回目に相当し、1995年5月24日の総選挙後における有権者の一般的な政治的態度と行動を探ることを目的としたものである。フランデレン（オランダ語地域）からは2099人（回答率65%）、ワロニー（フランス語地域）からは1258人、ブリュッセル（蘭仏二言語地域）からは311人の回答（回答率50%⁸）を得た大規模な調査（計3668人）である。

本調査データを用いることの意義として、まず選挙自体が 1993 年 1 月のマーストリヒト条約調印後最初に行われたことが挙げられる。ベルギーではその批准にあたって、国民投票のような形で有権者への直接的問いかけはなされなかった。従って、95 年選挙は同条約に関するいわば国民による最初の意思表示の機会であったことになり、その選挙に関して行われた同調査はヨーロッパ人意識を問うには最も適していると考えられる。また、国内的には、1994 年の憲法改正によって初めて地域・共同体議会議員が直接選出された選挙でもあり、連邦化開始後 20 年を経てようやく最重要の懸案を解決しえた重要な機会でもあった⁹。1995 年の総選挙はまさにヨーロッパ問題と連邦化問題の二つを最も意識させた選挙であったといえる。

ところで、梶田は欧州統合による副産物として、そこから取り残された人々の国民国家への回帰とそれによる極右勢力への支持基盤の提供を指摘している¹⁰。また、三竹は、近年ベルギーでは言語集団間の対立が高まり、連邦化によってもそれは解決されえず、「ベルギー・ネーション」の希薄化を招いていると指摘。こうした状況下で分離主義は「脱タブー化」し、オランダ語地域においてはフランデレンの独立を主張する極右政党の台頭をもたらしたと述べる¹¹。

両者の主張の事実関係を計量的に確認するために、その内に含意された関係性を抽出する必要がある。梶田の主張からは、極右現象とは可視化したヨーロッパに不適應な人々によって支えられたベルギーを希求する政治現象であり、また、三竹によれば、それは分離主義がもたらした地域を希求する政治現象となる。両者はそれぞれに全く異なる極右現象の解釈論であるが、いずれにせよ、上と下からの国家以外の空間の可視化とそれへの帰属意識の強まりが極右政党の台頭を招いているとするものである。この両者の主張から、アイデンティティと極右政党支持との間にある関係性について、以下のような仮説が立てられるだろう。

- (1) フレキシブル・アイデンティティ仮説に沿うなら、ヨーロッパ市民、ベルギー国民、地域市民といったそれぞれのアイデンティティの間には互いに負の相関は見られない（アイデンティティの非排他性）。
- (2) 梶田の主張から、欧州統合に取り残されたと感じる人々が極右政党の台頭を支えているなら、社会的疎外感や政治的有効性感覚の欠如などの社会的不適應を計る変数は欧州市民意識以外のアイデンティティ、すなわち国民意識や地域市民意識と正の相関を示すとともに、極右支持とも正の相関を示す（争点態度とアイデンティティ、

極右政党支持との関連)

- (3)三竹の主張から、分離主義が地域市民としてのアイデンティティを規定し、それが極右支持につながっているとすると、極右支持と分離主義的主張、地域市民意識の間には正の相関が存在する(民族地域主義と極右政党支持の関連)。

次章以下では、上記仮説の検証作業を通じて三空間併存時代のアイデンティティ関係を分析するとともに、極右台頭の規定要因群を探り、併せて個々のアイデンティティの極右支持に対する規定力について検証する。

2 : 三空間併存時代のアイデンティティ

2-1 : ベルギーにおける三空間併存時代のアイデンティティ

梶田の8類型に沿って、ベルギーにおけるアイデンティティ関係の構成をデータ的に示すと表2-1のようになる。以下の分析は欠損値を除外した有効パーセントの数値に基づくものであり、表中のEuはヨーロッパ市民意識、Belはベルギー国民意識、Fl/Waは地域市民意識(Flはフランドレン人意識、Waはワロニー人意識)を意味し、(+)はそれらの意識ありを、同じく(-)は意識なしを表すものとする¹²。

表2-1 アイデンティティ関係の構成

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	Eu(-)Bel(-)Fl/Wa(-)	108	2.9	3.1	3.1
	Eu(+)Bel(-)Fl/Wa(-)	96	2.6	2.7	5.8
	Eu(-)Bel(+)Fl/Wa(-)	94	2.6	2.7	8.5
	Eu(+)Bel(+)Fl/Wa(-)	144	3.9	4.1	12.6
	Eu(-)Bel(+)Fl/Wa(+)	911	24.8	25.9	38.5
	Eu(+)Bel(+)Fl/Wa(+)	1637	44.6	46.5	85.0
	Eu(-)Bel(-)Fl/Wa(+)	221	6.0	6.3	91.3
	Eu(+)Bel(-)Fl/Wa(+)	306	8.3	8.7	100.0
	合計	3517	95.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	151	4.1		
	合計	3668	100.0		

表2-1から、ベルギーでは8種類のアイデンティティの組み合わせタイプが現実存在す

ることが確認できる。注目すべきは、ヨーロッパ市民意識の有無にかかわらず、ベルギー国民意識と地域市民を同時に有すると答えた回答者が72.4%と、全体の3/4近くを占めたことである。また、ベルギー国民意識Bel(+)^aの存在のみでみた場合にその割合は79.2%、地域市民意識Fl/Wa(+)^bの存在のみでみた場合には同じく87.4%と高くなる。逆に、ヨーロッパ市民意識Eu(+)^cのみでみた場合、それは62%と低くなる。以上のことから、ベルギーでは国民、地域市民アイデンティティが欧州市民アイデンティティよりも優位にあると考えられる。

表2-2 地域別に見たアイデンティティ・タイプの構成

	地域			合計(%)
	Flanders	Wallonia	Brussels	
Eu(-)Bel(-)Fl/Wa(-)	3.3	3.3	0.7	3.1
Eu(+) ^a Bel(-)Fl/Wa(-)	2.3	3.1	3.9	2.7
Eu(-)Bel(+) ^b Fl/Wa(-)	3.5	1.4	2.0	2.7
Eu(+) ^c Bel(+) ^b Fl/Wa(-)	5.0	2.6	4.3	4.1
Eu(-)Bel(+) ^a Fl/Wa(+)	30.5	22.0	11.5	25.9
Eu(+) ^a Bel(+) ^a Fl/Wa(+)	41.8	50.3	62.8	46.5
Eu(-)Bel(-)Fl/Wa(+)	7.0	5.6	4.3	6.3
Eu(+) ^a Bel(-)Fl/Wa(+)	6.6	11.7	10.5	8.7
合計(%)	100.0	100.0	100.0	100.0

$$(X^2 = 141.412^a, df=14, p<0.001)$$

表 2-3 地域別に見たヨーロッパ市民意識

		地域			合計(%)
		Flanders	Wallonia	Brussels	
EU	Eu(-)	44.5	32.6	18.4	38.2
	Eu(+)	55.5	67.4	81.6	61.8
合計(%)		100.0	100.0	100.0	100.0

$$(X^2 = 101.542^a, df=2, p<0.001)$$

表 2-4 地域別に見たベルギー国民意識

		地域			合計(%)
		Flanders	Wallonia	Brussels	
BEL	Bel (-)	14.2	10.4	11.0	12.6
	Bel (+)	85.8	89.6	89.0	87.4
合計(%)		100.0	100.0	100.0	100.0

($X^2 = 10.747^a$, df=2, p<0.005)

表2-5 地域別に見た地域市民意識

		地域			合計
		Flanders	Wallonia	Brussels	
FL_WA	Fl/Wa(-)	19.4	24.0	19.7	21.0
	Fl/Wa(+)	80.6	76.0	80.3	79.0
合計		100.0	100.0	100.0	100.0

($X^2 = 10.410^a$, df=2, p<0.005)

これを地域別に示したものが表2-2のクロス表である。この表から、ブリュッセルにおいて三アイデンティティの混合タイプ(表1-1中タイプ1)が最も多い様子が見られる。また、個々のアイデンティティを地域別に検討すると(表2-3, 表2-4, 表2-5)、ヨーロッパ市民意識はブリュッセルでとりわけ強くなる反面、ベルギー国民意識と地域市民意識は地域による大きな差異を見せない。

以上のことから、ベルギーでのアイデンティティは国民国家体制の枠組み内で長年にわたって築き上げられたベルギー国民意識と、その特殊な歴史事情を背景に、時にナショナル・アイデンティティと対抗する形で醸成されてきた地域市民意識に重心が位置すると考えることができる。一方で、ヨーロッパ統合に積極的な役割を果たし、ヨーロッパの首都としてのブリュッセルを擁しているながらも、ヨーロッパ市民意識は旧来のアイデンティティに比肩しうるほどにはベルギー国民の間に浸透していないといえよう。例外的に、ブリュッセル居住者のみが、ヨーロッパ市民意識を比較的広く共有し、次いでワロニー地域がそれに続く。

2-2：三つのアイデンティティの関係

フレキシブル・アイデンティティ概念に沿えば、三つのアイデンティティは相互に排他的ではないことから、少なくともそれぞれの間に負の相関関係は認められないことになる。逆に、ナショナル・アイデンティティが上下の相対化という危機に直面しているとの認識からは、ヨーロッパ市民意識と国民意識、地域市民意識との間に負の相関が認められることになる。この三つのアイデンティティはどのような関係性を有するのであろうか。

表 2-6 各アイデンティティの関係

	EU	BEL	FL_WA	INT_BEL	INT_F_W	ID_BE_FW
EU		.061**	.078**	-.035*	.013	.024
BEL	.061**		.234**	-.379**	-.101**	.175**
FL_WA	.078**	.234**		-.135**	-.375**	-.311**
INT_BEL	-.035*	-.379**	-.135**		.362**	-.192**
INT_F_W	.013	-.101**	-.375**	.362**		.268**
ID_BE_FW	.024	.175**	-.311**	-.192**	.268**	

** p<0.01, * p<0.05

表 2-6 はヨーロッパ市民意識 EU、ベルギー国民意識 BEL、地域市民意識 FL_WA の有無、ベルギー国民意識の強さ INT_BEL、地域市民意識の強さ INT_F_W、ベルギー国民 - 地域市民の選択 ID_BE_FW といった変数間の相関を表したものである¹³。表からは、ヨーロッパ市民意識とベルギー国民意識および地域市民意識との間にほとんど相関は認められない（それぞれ $r=0.061$ と $r=0.078$, $p<0.01$ ）。逆に、ベルギー国民意識と地域市民意識の間には弱いながらも正の相関（ $r=0.234$, $p<0.01$ ）が見られる。これは、ヨーロッパ市民意識とベルギー国民意識および地域市民意識との間には後二者相互の間に見られるような関係性が存在せず、ベルギー国民意識と地域市民意識同士の関係についても後者が前者を相対化させるのではなく、相互補完的な性質があることを示している。ベルギー国民意識および地域市

民意識の強さとヨーロッパ市民意識との間にも顕著な関連は見い出せない¹⁴。

ヨーロッパ市民であるという意識は、ベルギー国民あるいは地域市民であるとする意識、およびそれらとの強さの間に関連はないと考えられ、その意味において、三つのアイデンティティ間における相互排他性の不在という指摘は一応支持できるといえよう（前章仮説(1)の支持）。ただ、それは同時に、ベルギー国民意識と地域市民意識が同一方向的な傾向を有するという特徴も内包したものである。

3：三空間併存時代のアイデンティティと極右支持

3-1：ベルギーにおける極右政党

現在極右政党は一般に「古い右翼 old right-wings」と「新しい右翼 new right-wings」とに峻別され¹⁵、近年台頭が著しい極右政党は後者に位置づけられる。本稿でベルギーの極右政党という場合、特にフランデレンにおけるフランデレン・ブロック Vlaams Blok とワロニーにおけるベルギー国民戦線 Front National Belgique を意味する¹⁶。両者はその誕生の経緯、歴史、主張等多くの面で相違を見せるが、ともにフランス国民戦線をプロトタイプとして急速に台頭¹⁷した新しい右翼に包括されるもので、最も重要な争点として新人種主義に則った移民排斥を主張する政治勢力である。

フランデレン・ブロックは、フランデレン民族地域主義政党であったフォルクスユニ Volksunie¹⁸の穏健化に反対して離党した急進派を中心に 1977 年に設立された¹⁹。当初の主な主張は、第二次大戦中の対ドイツ協力で処罰されたフランデレン人の名誉回復と民族地域主義的要求の実現であったが、党内世代交代の進展とそれによる政治的争点の重心移動の結果、1980 年代半ばには移民排斥を中心争点とする新右翼へと変貌した。同党がベルギーの国政に確固たる定着を果たしたのは 1991 年 11 月 24 日の総選挙であり、その後の各選挙でも着実に勢力を拡大し、現在に至っている。

一方、ベルギー国民戦線は 1985 年に設立され、1988 年以來いくつかの地方・州議会選挙で僅かな議席を獲得するにすぎない勢力であった。しかし、1991 年に代議院において初めて議席を獲得すると、1994 年には欧州議会で 1 議席を得るなど、数は少ないものの、連邦、地域、州、市町村の各レベルの選挙で定着に成功している。

スヴィンヘダウ等によれば、フランデレン・ブロックとベルギー国民戦線のイデオロギーの核は国民国家の内実に関する部分にではなく、反システムとエスノセントリズムにあ

り、そのことがフランス国民戦線の戦略踏襲と欧州議会での各国極右勢力の共闘をも可能としている²⁰。以下では実際に極右支持の規定的背景と連邦化問題および三空間時代のアイデンティティ関係について検証する。

3-2：極右支持の規定要因と説明変数

ミュッデは詳細な文献研究から極右分析のための概念を ナショナリズム nationalism、人種主義 racism、外国人嫌い xenophobia、反民主主義 anti-democracy、強い国家 strong-state の五つにまとめたが²¹、この総括はベルギーの新右翼を実証的に分析しようとする際に問題もある。例えば、ナショナリズムはフランデレン・ブロックにとってはフランデレン・ナショナリズムを、ベルギー国民戦線にとってはベルギー・ナショナリズムを意味するものであるし²²、人種主義は文化的差異に基礎を据えた新人種主義として展開されている。外国人嫌いはとりわけ反イスラムという形で語られ、議会主義的合法路線を選択する新右翼は反システムの・反政党的ではあっても、言葉の厳密な意味において反民主主義的であるとまでは言い切れない。さらに、冷戦後の現在、反共的な意味合いでの強い国家の希求は極右の主張からほとんど影を潜めてしまっている。

以上の点と本稿での分析目標から、極右政党に対する投票行動研究においてこれまで一般的に用いられてきた以下の諸変数を解析に用いる。すなわち、フランデレン・ブロックのイデオロギー的本質とされる三要素 連帯主義、民族主義、倫理・保守主義²³に関連して、それぞれ「権威主義的態度²⁴」「連邦制下の決定主体²⁵」「生命倫理に対する態度²⁶」、そして極右政党の主張から「外国人嫌い²⁷」と「政治的有効性感覚²⁸」、欧州統合に対する不応答説から「社会的疎外感²⁹」とした。

3-3：アイデンティティと極右支持の関係

ベルギー全体および各地域レベルにおける極右政党支持³⁰とアイデンティティに関して（表 3-1～表 3-4）、その支持とヨーロッパ市民意識、ベルギー国民意識、地域市民意識との間にいずれも十分に意味のある相関係数は得られなかった。注目すべきは、フランデレン・ブロックへの支持 - 投票および選好 - と地域市民意識の間にもほとんど相関が見られないことである³¹（表 3-2）。他方、国家に政策決定権を認めるべきか否かについては、フランデレン・ブロックを選好する有権者で非常に弱いながら負の相関が見られる（ $r=-0.119$,

p<0.01)。ただ、それは地域市民意識との相関 (r=-0.223, p<0.01) よりも弱く、フランデレン・ブロック支持者は幾分反中央・親フランデレン的傾向を見せるが、自らをフランデレン人と意識する人々が必ずしも親フランデレン・ブロック的ではないことになる。第一章仮説(3)は棄却すべきであろう。この点、地域民族主義政党として自己規定していないベルギー国民戦線や、独自の地域主義的伝統を抱えるブリュッセルでの極右支持に有意な相関が見られなかったこととは事情が異なる。各地域において、人々が抱く帰属意識と極右支持との間に確固たる関連は認められないといえる。

表 3-1 アイデンティティと極右政党の支持

	右ヨーロッパ意識	ベルギー国民意識	地域市民意識	投票右政党への	選挙右政党の	外国人嫌い	政治的有効性	社会的疎外感	権威主義的態度	憲法体制下の	対生命倫理に
ヨーロッパ市民意識		.082**	.078**	-.098**	-.098**	-.250**	.205**	-.233**	-.194**	-.053**	-.028
ベルギー国民意識	.061**		.234**	-.019	-.038**	.092**	.004	.011	.092**	.158**	-.012
地域市民意識	.078**	.234**		.038**	.038**	.061**	.025	.015	.064**	-.153**	-.029
極右政党への投票	-.098**	-.039	.038**		.797**	.237**	-.123**	.063**	.107**	-.099**	.013
極右政党の選好	-.098**	-.049**	.048**	.797**		.218**	-.066**	.032	.071**	-.148**	-.004
外国人嫌い	-.250**	.065**	.063**	.237**	.218**		-.464**	.306**	.562**	.048*	-.603*
政治的有効性	.205**	.004	.025	-.123**	-.092**	-.464**		-.408**	-.463**	-.129**	-.663**
社会的疎外感	-.233**	.011	.015	.063**	.032	.396**	-.406**		.448**	.071**	-.042*
権威主義的態度	-.194**	.092**	.064**	.107**	.071**	.562**	-.463**	.448**		.112**	-.103**
憲法体制下の決定主体	-.053**	.158**	-.153**	-.099**	-.148**	.048*	-.139**	.071**	.132**		.011
生命倫理に対する態度	.028	-.012	-.028	.013	.004	-.059**	-.063**	-.042**	-.163**	.011	

** p<0.01, * p<0.05

表 3-2 アイデンティティとフランデレン・ブロックの支持

	ヨーロッパ市民意識	ベルギー国民意識	地域市民意識	V B への投票	F N の選好	外国人嫌い	政治的有効性	社会的疎外感	極右主義的	連邦制下の決定主体	対生命倫理に対する態度
ヨーロッパ市民意識		.831	.893**	-.870**	-.687**	-.250**	-.240**	-.239**	-.171**	-.080**	-.840
ベルギー国民意識	.031		.289**	-.685	-.634	.060*	-.831	.627	.112**	.163**	-.884
地域市民意識	.080**	.209**		.849*	.687*	.065*	-.885	.629	.103**	-.223**	-.890**
VBへの投票	-.670**	-.008	.846*		.820**	.209**	-.186**	.682**	.127**	-.119**	.836
VBの選好	-.687**	-.034	.837*	.830**		.236**	-.189**	.699*	.102**	-.141**	.834
外国人嫌い	-.280**	.066*	.862*	.280**	.236**		-.488**	.420**	.563**	-.042	-.883
政治的有効性	.245**	-.032	-.885	-.186**	-.189**	-.488**		-.444**	-.477**	-.028	-.834
社会的疎外感	-.239**	.027	.829	.682**	.660*	.420**	-.444**		.420**	.060**	-.874**
極右主義的	-.171**	.112**	.189**	.127**	.102**	.563**	-.477**	.420**		.037	-.341**
連邦制下の決定主体	-.080**	.163**	-.223**	-.119**	-.141**	-.042	-.820	.680**	.837		.837
生命倫理に対する態度	-.840	.004	-.828**	.836	.616	-.063	-.834	-.674**	-.141**	.027	

** p<0.01, * p<0.05

表3-3 アイデンティティとベルギー国民戦線の支持

	ヨーロッパ市民意識	ベルギー国民意識	地域市民意識	F N への投票	F N の選好	外国人嫌い	政治的有効性	社会的疎外感	極右主義的	連邦制下の決定主体	対生命倫理に対する態度
ヨーロッパ市民意識		.880**	.870*	-.881**	-.637	-.260**	-.275**	-.230**	-.220**	-.090**	-.839
ベルギー国民意識	.100**		.384**	-.824	-.681**	.027	-.331**	-.641	.013	.079**	-.887*
地域市民意識	.070*	.304**		-.886	-.617	.066	-.844	-.685	.020	-.039	.829
FNへの投票	-.680**	-.024	-.886		.666**	.172**	-.882**	.627	.105**	.011	-.884**
FNの選好	-.637	-.081**	.817	.884**		.167**	-.892**	-.645	.045	-.027	.837
外国人嫌い	-.260**	.027	.865	.172**	.167**		-.481**	.380**	.643**	.180**	-.837
政治的有効性	.275**	.131**	.844	-.882**	-.682**	-.481**		-.422**	-.489**	-.183**	-.832
社会的疎外感	-.239**	-.041	-.883	.627	-.645	.389**	-.422**		.443**	.103**	.822
極右主義的	-.220**	.013	.820	.185**	.045	.643**	-.489**	.443**		.186**	-.882*
連邦制下の決定主体	-.090**	.079**	-.839	-.611	-.627	.158**	-.382**	.180**	.186**		-.872*
生命倫理に対する態度	.839	-.062*	.829	.684**	.667	-.067	-.832	.622	-.888*	-.072*	

** p<0.01, * p<0.05

表3-4 アイデンティティとブリュッセルにおける極右政党の支持

	ヨーロ ッパ 市民 意識	ベル ギー 国民 意識	地 域 市民 意識	極 右 政 党 へ の	選 好 政 党 の	外 国 人 嫌 い	政 治 的 有 効 性	社 会 的 疎 外 感	権 威 主 義 的	連 邦 制 下 の	生 命 倫 理 に 対 す る
ヨーロ ッパ 市民 意識		.053	.089	-.134*	-.055	-.233**	.181**	-.218**	-.159**	-.084	.014
ベルギー 国民意識	.062		.189**	-.030	-.031	.185**	-.038	.158**	.235**	-.158**	-.022
地域市民 意識	.082	.189**		.085	.105	.003	-.026	.028	.085	-.022	.088
極右政党 への投票	-.134**	-.030	.069		.638**	.325**	-.111	.073	.171**	-.046	-.071
極右政党 の選好	-.055	-.031	.105	.638**		.290**	-.119	.080	.138	-.196**	-.031
外国人嫌い	-.233**	.185**	.060	.325**	.290**		-.338**	.299**	.589**	.141**	-.041
政治的有効 性感覚	.181**	-.038	-.030	-.111	-.119	-.338**		-.348**	-.383**	-.135	-.017
社会的疎外感	-.218**	.189**	.026	.075	.058	.299**	-.348**		.323**	-.135	-.046
権威主義 的態度	-.159**	.235**	.085	.171**	.118	.589**	-.342**	.323**		.176**	-.103
連邦制下の 決定主体	-.084	.158**	-.022	-.046	-.196**	.144*	-.113	-.113	.176**		-.047
生命倫理に 対する態度	.014	-.022	.088	-.071	-.031	-.041	-.017	-.046	-.193	-.047	

** p<0.01, * p<0.05

3-4：極右支持の諸要因とアイデンティティ

「外国人嫌い」「政治的有効性感覚」「社会的疎外感」「権威主義的態度」「連邦制下の決定主体」「生命倫理に対する態度」のうち、極右政党への投票・選好と最も強く関連している変数はベルギー全体では外国人嫌いであり、極右支持者ほど外国人嫌いの傾向がある³²。しかし、アイデンティティでは、唯一ヨーロッパ市民意識がそれと有意に弱い負の相関を示すのみである ($r=-0.250, p<0.01$)。政治的有効性感覚についても、極右政党への投票で非常に弱い負の相関を見せるが ($r=-0.123, p<0.01$)。ヨーロッパ市民意識では逆に正の有意な相関を見せる ($r=0.205, p<0.01$)。社会的疎外感と極右支持との間にほとんど相関はなく (投票で $r=0.063, p<0.01$)。ヨーロッパ市民意識との間に弱い負の相関を見せる ($r=-0.233, p<0.01$)。権威主義的態度も極右政党への投票との間にごく弱い正の相関を見せるが ($r=0.107, p<0.01$)。ヨーロッパ市民意識はそれとの間に弱い負の相関を見せる ($r=0.196, p<0.01$)。連邦制下の決定主体は極右政党の選好との間に非常に弱い負の相関 ($r=-0.140, p<0.01$)を、ベルギー国民意識との間に非常に弱い正の相関 ($r=0.150, p<0.01$)を、地域市民意識との間に非常に弱い負の相関 ($r=-0.153, p<0.01$)をそれぞれ見せる。

生命倫理に対する態度に関しては、いずれも有意な相関は見られない。

以上のことから、相関係数の大きさをも考え合わせると、ベルギー全体での極右支持と最も重要な関連を示す変数としては外国人嫌いが考えられ、政治的有効性感覚が極右政党への投票と、連邦制下の決定主体は極右政党の選好との間に非常に弱い関連がある。一方、アイデンティティでは、ヨーロッパ市民意識が外国人嫌い、社会的疎外感、政治的有効性感覚、権威主義的態度と関連を示すが、その感覚を有する人々は外国人に対して寛容で、社会的に疎外されているとは感じず、政治的有効性感覚を有するとともに、権威主義に囚われ難い傾向が見受けられる。これは極右支持とは正反対の傾向である。ベルギー国民意識と地域市民意識は連邦制に対する態度と弱い関連があり、ベルギー国民意識が強いほど親中央的で、地域市民意識が強いほど反中央的との若干の傾向が見られる。

フランデレン・ブロック支持者では、ベルギー全体の極右支持と比べて全ての変数で相関係数は大きくなる。同党への支持は外国人嫌いとも最も強く関連し、それより弱い程度で政治的有効性感覚や連邦化問題、権威主義的態度と関連を示す。また、アイデンティティではヨーロッパ市民意識が外国人嫌い、政治的有効性感覚、権威主義的態度に関して極右支持の場合と逆の相関を見せる。ベルギー国民意識と地域市民意識では、連邦化問題や権威主義的態度との間で若干相関が強くなる。フランデレンでは、人々は三地域中最も連邦化問題に敏感であるが、フランデレン人意識と極右支持の間にこれらの変数について同じ性質の傾向は認められない。

ベルギー国民戦線支持者では、唯一外国人嫌いのみが投票・選好の双方で意味のある相関を見せるが、それはごく弱いもので、三地域中最も小さい³³。また、非常に弱い同党への投票と権威主義的態度に有意な相関が認められる（ $r=0.105$, $p<0.01$ ）。ベルギー国民意識とワロニー人意識についても同じように有意な相関は少なく、1%の有意水準では唯一ベルギー国民意識と政治的有効性感覚との間にごく弱い相関が見られる（ $r=0.131$, $p<0.01$ ）。逆に、ヨーロッパ市民意識に関しては、外国人嫌い、政治的有効性感覚、権威主義的態度のいずれについても三地域中顕著に最も大きな相関を見せるが、やはり極右支持とは全て逆の方向性にある。ワロニーでヨーロッパ意識を有する人々が最も権威主義に囚われ難く、外国人に対して寛容で、政治的有効性感覚を有しており、その意味で極右支持と最も対抗的であるといえよう。

ブリュッセルでも極右支持と最も強く関連しているのは外国人嫌いで、その数値は三地域中最も大きい³⁴。また、極右政党への投票と権威主義的態度との相関も $r=0.171$ （ $p<0.01$ ）と三地域中最高で、選好と連邦制下の権限主体についても有意に最も大きな相関を示す

($r=-0.196$, $p<0.01$)。また、他の地域と同じく、ヨーロッパ人意識は外国人嫌い、政治的有効性感覚、社会的疎外感、権威主義的態度と有意な相関を見せ、その方向性でも極右支持とは逆となる。しかし、ベルギー国民意識は外国人嫌い、権威主義的態度、社会的疎外感といった変数と相関を見せており、三地域中最も明確にその本質を表すとともに、ヨーロッパ市民意識と対抗的で、極右支持と親和的な一面さえ見せている。

極右支持は主に外国人嫌い、政治的有効性感覚、権威主義的態度と意味ある関連を有しているが、三地域に共通してヨーロッパ市民意識がこれと対抗的な本質を備えている。一方で、ベルギー国民意識と地域市民意識は地域ごとに差が見られ、ブリュッセルにおけるベルギー国民意識が若干極右支持と同質の傾向を見せる以外は、はっきりした傾向は読み取れない。従って、第一章での仮説(2)は棄却されるべきであろう。

4：アイデンティティと極右支持の規定要因

本章では、これまでに用いた争点態度変数、アイデンティティに社会的属性変数を加えて、これらが極右支持を因果的にどのように規定しているかについて、パス・モデルを用いて分析する(図 4-1~図 4-6)。ただし、ワロニーおよびブリュッセルにおける極右支持者は少なく、また、第一章仮説(3)の三竹の主張を検証する意味で、地域レベルでの分析はフランデレンのみを対象とする。各パス・モデルは下段に社会的属性を、中段には争点態度を表す諸要因を、上段にはアイデンティティと極右政党への選好を三層的に配置し、因果関係は最上段の極右政党への投票へと向かう下から上への矢印で表している。

4-1：パス・モデルによる分析 1 ベルギーの場合

図 4-1 から、極右政党への投票は社会的属性としての性別、争点態度としての外国人嫌い、および極右政党の選好によって直接規定されていることが分かる($r^2=0.66$)。しかし、前二要因は選好要因に比べるとその規定力はかなり弱いことも確認できる。つまり、極右政党への投票は男性であることと、外国人嫌いの感情によってごく弱く、そして極右政党の選好を有することによって強く規定されているといえる。

極右政党の選好は性別、年齢といった社会的属性、政治的有効性感覚、外国人嫌い、連邦制下の決定主体といった争点態度によって規定され、さらにヨーロッパ市民意識によっても規定されている。すなわち、男性で年齢が下がること、政治的有効性感覚が欠如し、

外国人嫌いの感情を有すること、連邦化問題については反中央的で、ヨーロッパ市民感覚が希薄であることが極右政党の選好に影響を与えていると考えられる。しかし、これら全体の規定力は極めて小さい ($r^2 = 0.08$)。

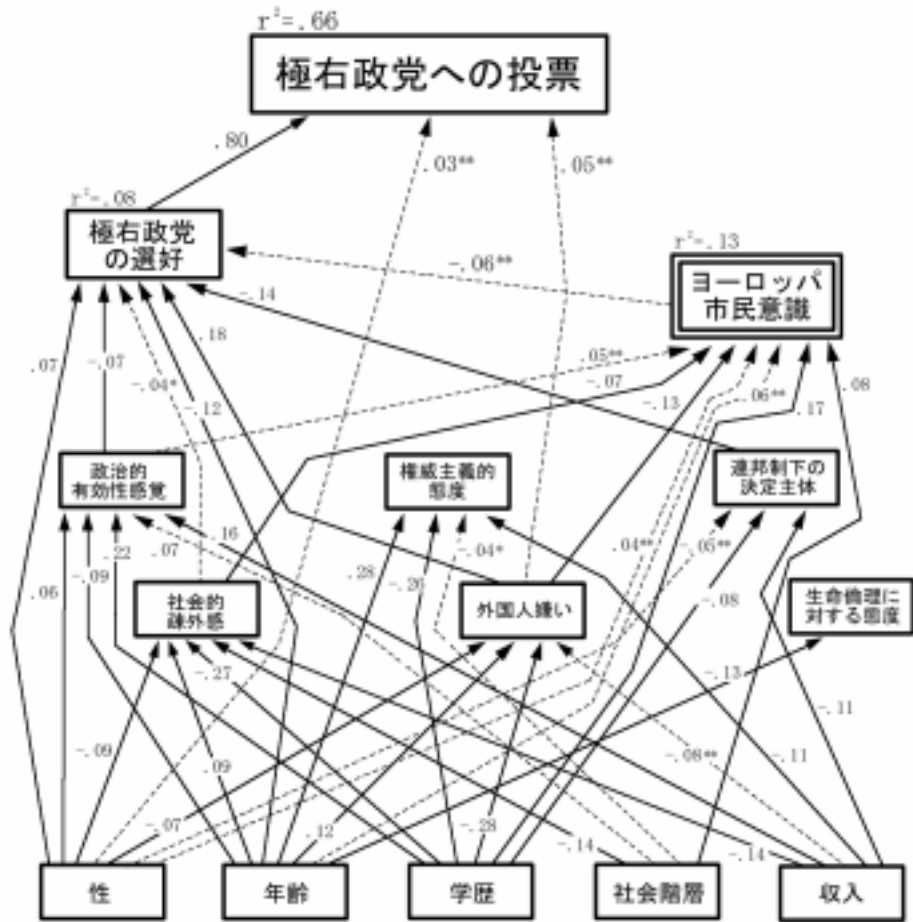
ヨーロッパ市民意識は収入を除く四つの社会的属性、および政治的有効性感覚、社会的疎外感、外国人嫌いによって規定されており ($r^2 = 0.13$)、男性で年齢、学歴および社会階層の上昇、政治的有効性感覚を持ち、社会的疎外感は弱く、外国人に対しても寛容的であることがそれを抱かせる要因となっていると考えられる。

ベルギー国民意識は性別と社会階層によって規定され、争点態度では社会的疎外感と外国人嫌いの影響が見られなくなるとともに、新たに政治的有効性感覚と並んで権威主義的態度と連邦制下の決定主体が規定力を持つようになる（図 4-2）。すなわち、ベルギー国民意識は女性であること、社会階層の上昇、政治的有効性感覚を抱き、権威主義的傾向が強くと、高い中央志向によって規定されると考えられる。ただ、これらの変数による寄与率はヨーロッパ市民意識と比べ著しく小さく ($r^2 = 0.04$)、総合的な規定力の弱さを示す結果となった。ベルギー国民意識は極右政党支持には影響力を有していない。

地域市民意識は収入、政治的有効性感覚、権威主義的態度、外国人嫌い、および連邦下の決定主体によって規定されていることが示された（図 4-3）。ベルギーにおける地域市民意識は収入の上昇、政治的有効性感覚を抱き、権威主義的で外国人嫌いの感情を有すること、反中央的であることによって規定されていると考えられる。地域市民意識も極右政党支持に影響力を有していない。

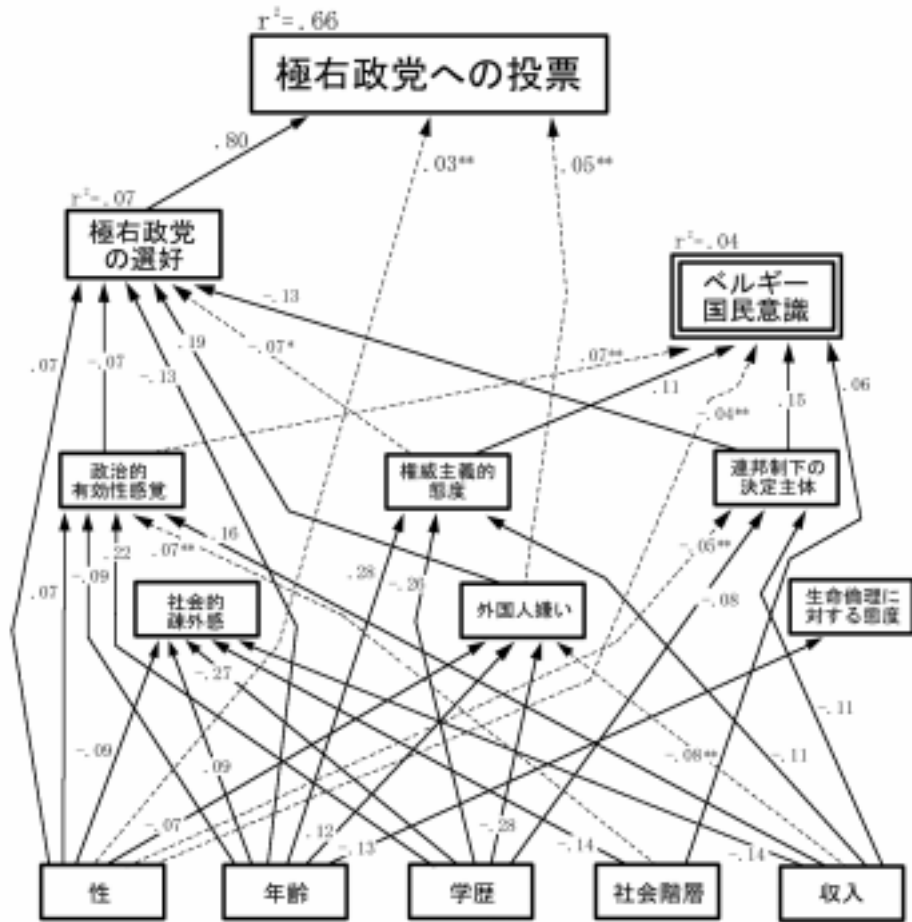
ベルギー全体では、極右政党への投票・選好、アイデンティティに対して外国人嫌いの感情が最も意味ある役割を演じており、次いで、極右政党への投票を直接規定していないが連邦化問題に対する態度が同党の選好、ベルギー国民意識、地域市民意識に規定力を有していると考えられる。また、社会的属性変数について、規定している変数の数では性別が、規定力の強さでは年齢と学歴が特に争点態度に対して重要な位置を占めている。

図 4-1 ベルギーにおけるヨーロッパ市民意識と極右支持のパス図



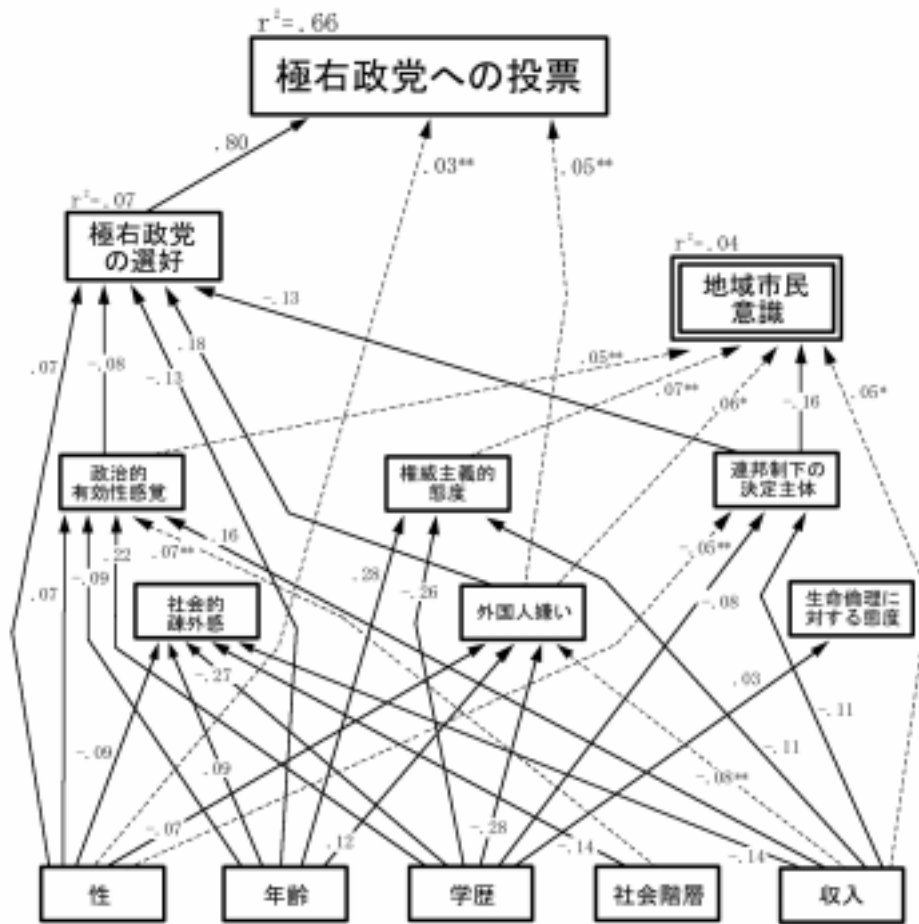
p<0.001, ただし、**は p<0.01, *は p<0.05

図 4-2 ベルギーにおけるベルギー国民意識と極右支持のパス図



p<0.001, ただし、**は p<0.01, *は p<0.05

図 4-3 ベルギーにおける地域市民意識と極右支持のパス図



p<0.001, ただし、**は p<0.01, *は p<0.05

4-2：パス・モデルによる分析2 フランデレンの場合

フランデレンにおける極右支持とアイデンティティの関係でまず言えることは、極右政党への投票がベルギー全体での場合と同様、極右政党の選好、外国人嫌いによって直接規定されていることである。しかし、三つのアイデンティティのどれも同党の選好を規定していない点では相違を見せる。また、極右政党への投票およびアイデンティティに関する寄与率はともにベルギー全体での場合よりも高くなっていることから（それぞれ $r^2 = 0.75$ と $r^2 = 0.14$ ）、モデルとしての説明力も若干高くなったと判断できる。つまり、フランデレンでは男性であること、外国人に対して否定的な感情を持つこと、極右政党に対して好意的であることが極右政党への投票を促していると、より明確に判断できる。

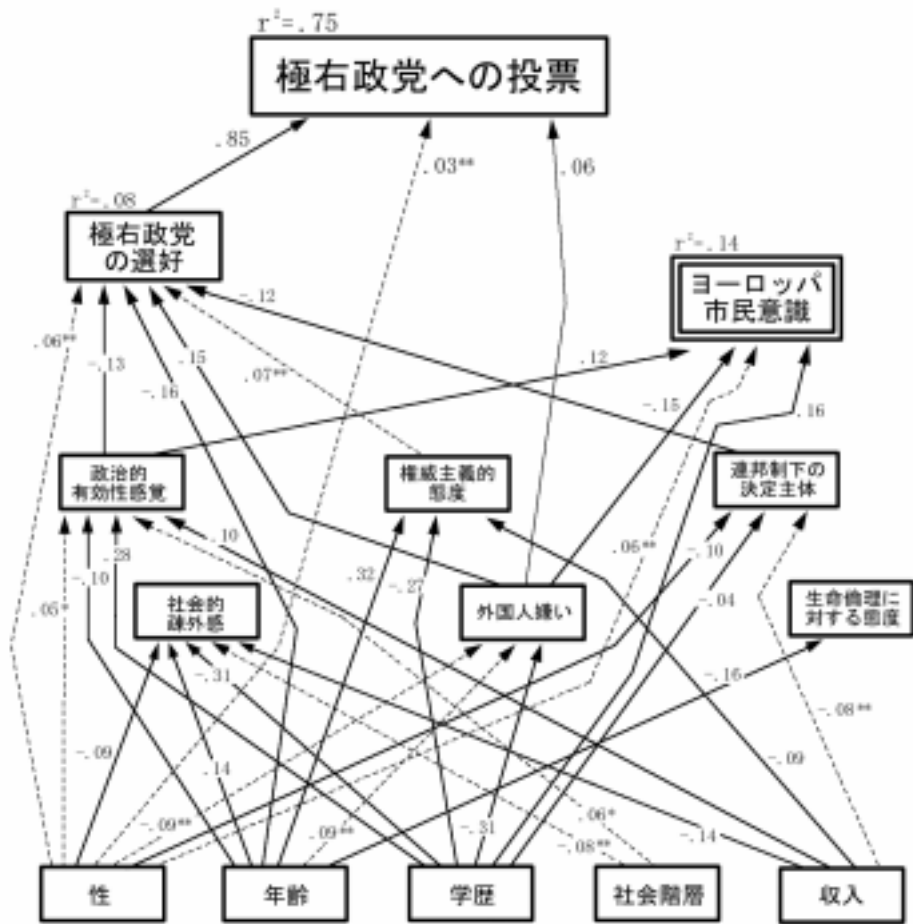
極右政党の選好は性別、年齢、政治的有効性感覚、権威主義的態度、外国人嫌い、連邦制下の決定主体によって規定されている。フランデレンではベルギー全体での場合と同様、男性・若年層であること、政治的有効性感覚に乏しいこと、外国人に対して否定的感情を持つこと、反中央的感情などによって極右政党の選好は強まると考えられる。ただ、年齢と政治的有効性感覚の規定力は若干強くなり、外国人嫌いの規定力は逆に若干弱くなっている点に相違がある。これらを総合した影響力自体はベルギー全体での場合と同様極めて小さい（ $r^2 = 0.07$ ）。

ヨーロッパ市民意識は性別、学歴、政治的有効性感覚、外国人嫌いによって規定され、男性で高学歴、政治的有効性感覚を持ち、外国人に対して寛容であることがヨーロッパ市民であるとの感情を抱かせる要因と考えられる（図 4-4）。ベルギー国民意識は権威主義的態度と連邦制下の決定主体によってのみ規定され（図 4-5）、ベルギー全体での場合と同様相異なる。フランデレンでは権威主義的で親中央的であるといった態度によってのみ、ベルギー国民意識が規定されていると考えられる。地域市民意識（フランデレン人意識）では政治的有効性感覚と外国人嫌いによる規定力は消え、権威主義的態度と連邦制下の決定主体の規定力は強くなる。また、新たに年齢による影響が見られるようになる。つまり、フランデレン人であるとする意識するは、加齢と収入の多さ、権威主義的傾向と反中央的な態度によって規定されると考えられる。

ベルギー全体における場合と同様、フランデレンにおいても外国人嫌いの感情が極右支持に対して、連邦制に関する考え方がその選好に対して重要な役割を果たしている。さらに、後者はベルギー国民意識と地域市民意識に対しても大きな規定力を示している。ただ、外国人嫌いの感情がフランデレン人意識に影響を与えないことは、フランデレン民族主義

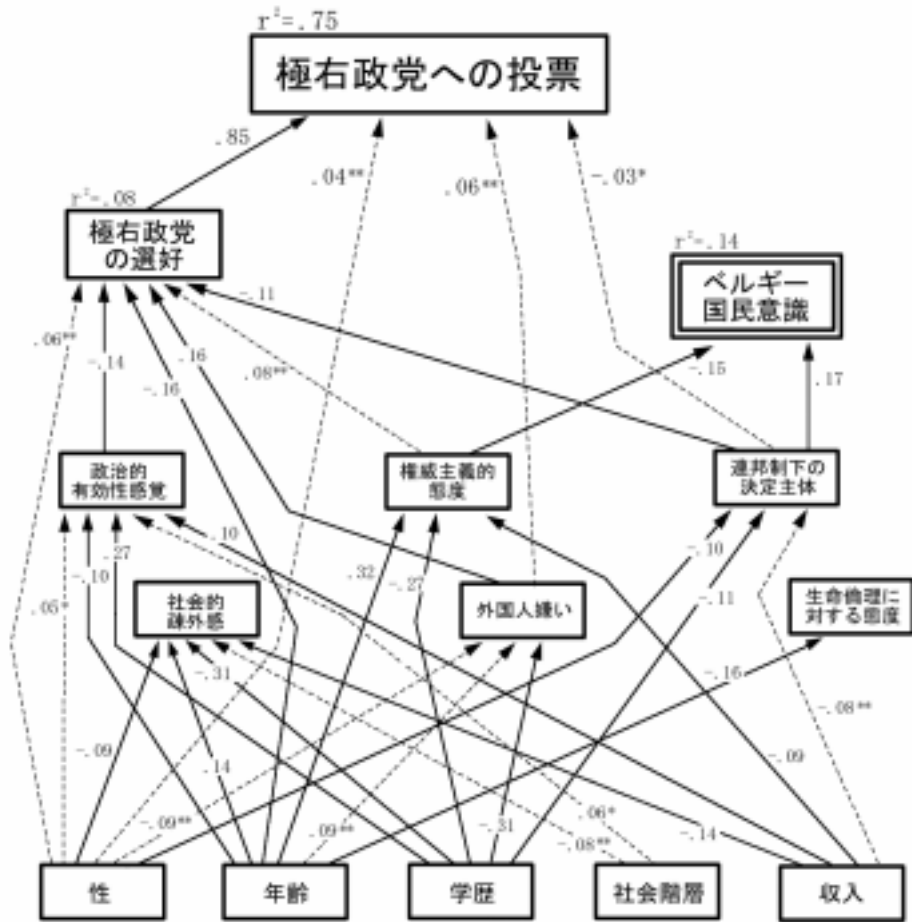
と極右現象の関係を考える上で重要な点である。

図 4-4 フランデレンにおけるヨーロッパ市民意識と極右支持のパス図



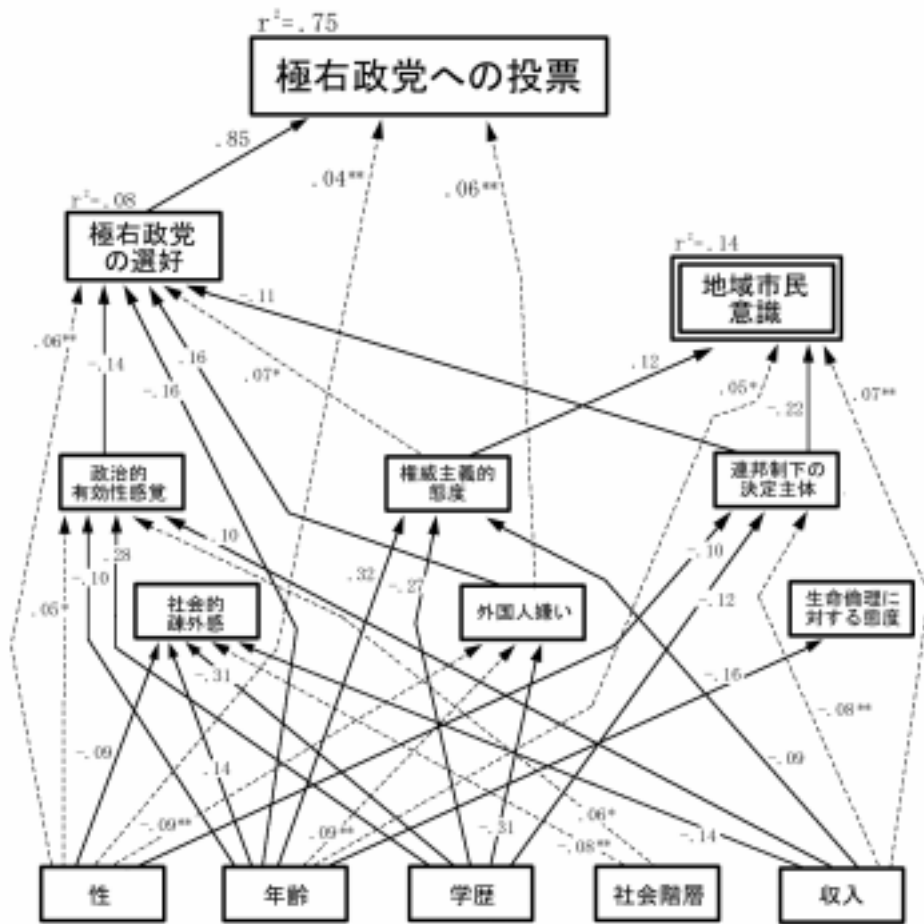
p<0.001, ただし、**は p<0.01, *は p<0.05

図 4-5 フランデレンにおけるベルギー国民意識と極右支持のパス図



$p < 0.001$, ただし、**は $p < 0.01$, *は $p < 0.05$

図 4-6 フランデレンにおける地域民意識と極右支持のパス図



p<0.001, ただし、**は p<0.01, *は p<0.05

4-3：アイデンティティと極右支持の規定要因

本章で特に確認すべき点は、(1)実際にヨーロッパ市民意識、ベルギー国民意識、地域市民意識が極右現象に因果的に影響力を有しているかどうかということであり、さらに、(2)極右支持を規定する他の要因群の可能性に言及することであろう。

第一番目の点について、ベルギー全体でヨーロッパ市民意識が僅かに極右政党への選好をネガティブに規定する以外は、アイデンティティが極右支持に持つ影響力を確認することはできなかった。とりわけ、フランデレンでフランデレン人意識が極右支持を規定していないのは、両者の関連の希薄さを人々の意識の面から浮き彫りにした結果といえよう。民族地域主義をめぐる問題 - 「連邦制下の決定主体」変数 - はベルギー国民意識や地域市民意識を直接規定することはあっても、それらを介して極右政党への投票を促すことはないと考えられる。

第二番目の点については、ベルギー全体でみた場合に極右政党の選好がヨーロッパ市民意識によって規定されている以外は、ベルギー、フランデレンの両レベルにおいて、全く同じ要因群によって規定されていることが確認できた。その要因群とは、極右政党への投票については社会的属性としての性別と争点態度としての外国人嫌い、および極右政党の選好である。また、極右政党の選好は性別と年齢、政治的有効性感覚、社会的疎外感、外国人嫌い、連邦制下の決定主体によって規定されている。中でも、極右政党への投票に対する極右政党の選好の規定力が強いことが確認できた。

以上のことから、極右政党への投票はアイデンティティではなく、それ以外の要因によって直接規定されていると考えられる。残念ながら、今回設定した諸変数の総合的な規定力は、ベルギー、フランデレンのいずれのレベルにおいても弱く、極右支持についての十分な解明には至っていない。新たな説明変数の発見が今後の一つの課題となろう。しかし少なくとも、これまで多くの先行研究によって指摘されてきた極右支持と性別、年齢、学歴、政治的有効性感覚、外国人嫌い、そしてベルギーの特殊争点としての連邦化問題との間にある因果的な関連を確認することができた。

おわりに

本稿では、ヨーロッパにおける三空間併存時代のアイデンティティが極右現象とどのような関係を有するかを分析した。そのために(1)アイデンティティの非排他性、(2)争点態

度とアイデンティティ、極右政党支持との関連、(3)民族地域主義と極右政党支持の関連という三つの仮説を設定し、その検証を行った。第一の仮説に関してはこれを支持し、一定の留保を付した上で、ベルギーへのフレキシブル・アイデンティティ仮説の適用妥当性を確認した。ベルギーにおいては既に多くの人々がヨーロッパ市民意識、ベルギー国民意識、地域市民意識の三つのアイデンティティを相互排他的に矛盾させることなく抱いていることが明らかとなった。第二、第三の仮説に関しては、第三章での分析からこれを棄却した。アイデンティティや民族地域主義が極右支持との間に関連を有していることや因果的な規定力を持つことは確認できない。

今回の分析では、これまでの極右研究の成果を相関関係だけではなく、因果関係からも検証した。極右政党への投票は同党の選好によって最も大きく規定されているところであり、それ以外の要因 - 有権者の社会的属性や争点態度 - の規定力は意外に小さいことが一つの発見であった。今後、より規定力を有する説明変数の発見に努める必要があるだろう。

三空間への帰属意識は、国家体制レベルでの変化の議論とは一線を画する形で進行している。欧州統合の進展にともない、同じ国民国家内に住まう人々の一部がヨーロッパ市民意識を獲得することができても、そうでない多くの人々は依然としてベルギー・地域民族主義関係の中で日々を送っており、ヨーロッパ市民意識はいまだ従来のアイデンティティへのプラス・アルファでしかない。ただ、そのヨーロッパ市民意識は外国人に対して最も大きな寛容性を示すものであり、極右支持者と対極的な位置に立つようでもある。「ヨーロッパの国民国家化」との指摘に対しては今後の慎重な研究が求められる。

ベルギー固有の課題である民族地域主義と極右支持の関係について、ベルギーは 1994 年の憲法改正によって名実ともに連邦国家へと移行したが、こうした国内体制の変革と人々のアイデンティティの変化、さらにその先に民族地域主義を起源とする極右政党の台頭を一つの線で結んで解釈する見方がある。この点については、今回の分析からその関係を確認することはできなかった。昨今のベルギーにおける新右翼現象がニュー・ポリティクスの対立軸に位置を占める政治課題に起因するものであり、長きにわたってベルギー史を牽引してきた、その意味でオールド・ポリティクスなアジェンダである民族地域主義問題をめぐる政治現象ではないと考えられる。

(Hideaki Uenishi, 本学大学院国際関係研究科研究生)

¹ 例えば、押村 [p98] の主張。

² 例えば、西川 [p26-30] の指摘。

³ 梶田 1993a p47-48

⁴ Hroch 2000

- ⁵ 社会科学の分析単位についての指摘[梶田 1993a p48]。
- ⁶ The data/tabulations utilised in this publication were made available by the ISPO and PIOP – Interuniversity Centres for Political Opinion Research, sponsored by the Federal Services for Technical, Cultural and Scientific Affairs. The data were originally collected by Jaak Biliet, Marc Swyngedouw, Ann Carton and Roeland Beerten (ISPO) for the Flemish voters and André-Paul Frogner, Anne Marie Aish-Van Vaerenbergh, Serge Van Diest and Pierre Baudewyns (PIOP) for the French-speaking. Neither the original collectors of the data nor the Centre bears any responsibility for the analysis or interpretations presented here.
- ⁷ 以下、特に出典が明記されていない図表に関しては、筆者作成。
- ⁸ フロニーおよびブリュッセル合計の回答率
- ⁹ ベルギー国家改革の詳細については三竹[1995, 1997, 1998]を参照。
- ¹⁰ 梶田 1993c p75
- ¹¹ 三竹 1998 p119-120
- ¹² これら三つのアイデンティティの有無を示す変数を得るため、ヨーロッパ市民 European citizen、地域市民 Flemings/Walloons、ベルギー国民 Belgian であることを意識する頻度を問う Q114, Q115_1, Q116_1 から欠損値と回答“Don't know”を削除し、“Never”および“Seldom”（ただし、Q114 については“Never”のみ）との回答を(-)、“Sometimes”、“Often”、“Almost always”（ただし、Q114 については“Sometimes”、“Often”のみ）との回答を(+)として集計し直した。その強さに関しては、ヨーロッパ市民に関する設問が設定されていなかったため、これを変数として扱うことはできなかった [ISPO/PIOP, 1998a]。
- ¹³ 変数 INT_F_W および INT_BEL はそれぞれフランデレン人・フロニー人意識、ベルギー国民意識の強さを問うた Q116_2 および Q115_2 を、変数 ID_BE_FW は Q118 を使用 [ISPO/PIOP 1998a]。
- ¹⁴ EU と INT_BEL との間の相関は $r = -0.035$ ($p < 0.05\%$)。
- ¹⁵ 西欧各国における極右政党の「古い右翼」「新しい右翼」へのカテゴリー化に関しては上西 [2001] を参照。
- ¹⁶ この他にリエージュを中心として活動する極右政党として Agir があるが、その影響力の小ささからベルギー人研究者の間でも未だ極右研究の対象とされていない。
- ¹⁷ Kitschelt 1997 p91
- ¹⁸ 同党は 2001 年 11 月に分裂し、保守派は新フランデレン連合 Nieuw-Vlaamse Alliantie として、左派は SPIRIT として再出発した。
- ¹⁹ このとき実際に設立されたのはフランデレン民族党 Vlaams Nationale Partij とフランデレン人民党 Vlaamse Volkspartij であり、翌 78 年にフランデレン連合 Vlaams Blok として共闘が成立。後に前者が後者を吸収し、今日のフランデレン・ブロックへと至る [Gijssels p81-88]。
- ²⁰ Swyngedouw & Gilles 1999 p18
- ²¹ Mudde 1995 p218
- ²² Maddens 等によれば、フランデレンでは人々はフランデレン人意識に外国人嫌いの感情を結びつける一方、フロニーではそれはベルギー国民意識に結びついている [Maddens, Billiet & Beerten 1999 p310]。
- ²³ Van Eycken & Schoeters の指摘した 連帯主義、民族主義、倫理的保守主義による [1988 p37]。なお、Swyngedouw & Gilles はフランデレン・ブロックの連帯主義が権威主義理論の流れを汲む権威主義的連帯主義であることを指摘している [Swyngedouw & Gilles 1999 p9]。
- ²⁴ Q95_1 ~ 95_7 (Cronbach's $\alpha = 0.7988$) の因子得点をその変数とした。
- ²⁵ Q81 (フランデレン/フロニーあるいはベルギーのどちらに決定権を認めるべきか) を変数とした [ISPO/PIOP 1998a p92]
- ²⁶ Q92 (墮胎の是非) および Q93 (安楽死の是非) (相関係数は 0.549) から主成分分析により変数を得た [ISPO/PIOP 1998a p146-147]。
- ²⁷ Q108_1 ~ 108_13 を因子分析した結果、「外国人嫌い」と「イスラム系移民に対する印象」という二つの因子が析出できた。前者は Q108_1, 108_2, 108_4, 108_5, 108_7, 108_9, 108_11, 108_12 からなるもので (Cronbach's $\alpha = 0.9101$)、その因子得点を「外国人嫌い」の変数とした [ISPO/PIOP, 1998a]。
- ²⁸ Q97_1 ~ 97_13 (政治的有効性感覚) を因子分析したところ、二つの因子が析出できたが、信頼性分析の結果、全ての設問を用いたときに最も高い信頼性が確保できた (Cronbach's $\alpha = 0.8851$)。従って、全設問の平均値を政治的有効性感覚の説明変数とした [ISPO/PIOP 1998a]。
- ²⁹ Q39_1 ~ 39_7 の因子分析から、「社会的疎外」と「社会的不信」の二因子が得られた。前者は Q39_2, 39_4, 39_6, 39_7 (Cronbach's $\alpha = 0.8858$)、後者は Q39_1, 39_3, 39_5 (Cronbach's $\alpha = 0.6132$) からなる。本分析では「社会的疎外」を説明変数とした [ISPO/PIOP 1998a]。
- ³⁰ ここでの「支持」とは、95 年総選挙における「投票」(Q42)、および 極右政党の「選好」(第一に愛着を感

じる政党 - Q71_1)とする[ISPO/PIOP 1998a]。

³¹ 同党への投票および選好との間に、5%の有意水準でそれぞれ 0.046, 0.057 の正の相関が見られる。

³² 極右政党への投票では $r=0.237$ 、選好では $r=0.210$ (ともに 1%の水準で有意)の相関を見せている。なお、この点に関しては、昨今の新しい右翼が移民問題を背景に台頭してきたとの一般認識と一致する。

³³ FN への投票で $r=0.172$ 、選好で $r=0.167$ (ともに $p<0.01$)。

³⁴ 極右政党への投票で $r=0.326$ 、選好で $r=0.290$ (ともに $p<0.01$)。

[参考文献]

- Argyrous G. (1997). *Statistics for Social Research*, London: Macmillan Press LTD
- Billiet J. (1998). 'Qui vote pour le Vlaams Blok?', in: Delwit, De Waele, Rea e.a., *L'Extrême droite en France et en Belgique*, Bruxelles: Éditions Complexe
- Delwit P. (1998). 'Qui vote pour le Front national en Belgique?', in: Delwit, De Waele, Rea e.a., *L'Extrême droite en France et en Belgique*, Bruxelles: Éditions Complexe
- Gijssels H. (1992). *Het Vlaams Blok*, Leuven: Kritak
- Hofmann-Göttig, J. (1989). 'Die Neue Rechte: Die Männerparteien', *Aus Politik und Zeitgeschichte* B41-42: 21-31
- Hroch M. (2000). *Social Preconditions of National Revival in Europa; A Comparative Analysis of the Social Composition of Patriotic Groups among the Smaller European Nations*, New York: Columbia University Press
- ISPO/PIOP (1998a). *1995 General Election Study Belgium, Codebook and Questionnaire*, Leuven/ Louvain-La-Neuve: ISPO/PIOP
- ISPO/PIOP (1998b). *1995 General Election Study Belgium, Data & Codebook*, Leuven/ Louvain-La-Neuve: ISPO/PIOP
- Kitschelt, H. (1997). *The Radical Right in Western Europe, A Comparative Analysis*, The University of Michigan Press
- Maddens, B., Billiet, J. & Beerten, R. (1999). 'De (sub)nationale identiteit en de houding tegenover vreemdelingen in Vlaanderen en Wallonië', in: Deprez / Vos (Red.), *Nationalisme in België, Identiteiten in beweging 1780-2000*, Antwerpen: Houtekiet
- Mudde C. (1995). 'Right-Wing extremism analyzed: A comparative analysis of the ideologies of three alleged right-wing extremist parties (NPD, NDP, CP'86)', *European Journal of Political Research* 27: 203-224
- Swyngedouw, M & Gilles I. (1999). *The extreme-right Utopia in Belgium and France*, Leuven: I.S.P.O.
- Swyngedouw, M. (1995). 'Les nouveaux clivages dans la politique belgo-flamande', *Revue Française de science politique* 45: 775-790.
- Swyngedouw, M. (1992). *Waar voor je waarden: De opkomst van Vlaams Blok en AGALEV in de jaren tachtig*. Leuven: I.S.P.O.
- Van Eycken F., Schoeters S. (1988). *Het Vlaams Blok Marcheert*, Deurne: Imprint
- イングルハート R. (村山皓、富沢克、武重雅文訳)『カルチャーシフトと政治変動』 1993 東洋経済新報社
- 石村貞夫『SPSSによる多変量データ解析の手順』 1998 東京図書
- 上西秀明「サブライ・サイドから見た西欧極右政党の類型」 2001 立命館国際地域研究
- 上西秀明『ベルギー・蘭語地域における新右翼の台頭とその実相』 立命館大学大学院国際関係研究科修士論文 1998
- 押村高「機構改革と民主化に向けて」村田良平『EU-二一世紀の政治課題』 1999 勁草書房
- 賀来健輔・丸山仁編著『ニュー・ポリティクスの政治学』 2000 ミネルヴァ書房
- 梶田孝道『統合と分裂のヨーロッパ』 1993a 岩波書店
- 梶田孝道『新しい民族問題 EC 統合とエスニシティ』 1993b 中央公論社
- 梶田孝道「ヨーロッパ・アイデンティティと国民意識のあいだ — 「国籍」と「欧州市民権」をめぐる問題—」 榊山紘一・長尾龍一編『ヨーロッパのアイデンティティ』 1993c 新世社
- 小林良彰『現代日本の政治過程 日本型民主主義の計量分析』 1997 東京大学出版会
- 田部井明美『SPSS 完全活用法 共分散構造分析(Amos)によるアンケート処理』 2001 東京図書
- 西川長夫「歴史的過程としてのヨーロッパ」西川長夫・宮島喬編『ヨーロッパ統合と文化・民族問題』 1995 人文書院

ベルギーにおける三空間併存時代のアイデンティティと極右問題（上西）

-
- 三竹直哉「ベルギーにおける言語政策と統治機構の再編（一）」『政治学論集 第41号』 1995 駒
沢大学法学部
- 三竹直哉「ベルギーにおける言語政策と統治機構の再編（二）」『政治学論集 第46号』 1997 駒
沢大学法学部
- 三竹直哉「ベルギーにおける言語政策と統治機構の再編（三）」『政治学論集 第47号』 1998 駒
沢大学法学部
- 三竹直哉「連邦制下の民族対立 —ベルギーの言語集団対立」 宮島喬編『現代ヨーロッパ社会論 紛
争の中の変容と葛藤』 1998 人文書院